

建保・承久年間の運慶と鎌倉

塩澤寛樹（日本橋学館大学）

建保・承久年間の鎌倉には、運慶の制作した、幕府要人のかかわる三件の本尊が祀られたことが知られている。いずれの作例も現存しないとみられるが、これらは鎌倉時代の仏教造像を考察する上で、また仏師運慶について考察する上でも、重要な造像であると考えられる。従来これらの事績は、運慶が晩年になっても鎌倉幕府との縁を保った証として注目されてきた。その見方は誤りではないが、この時期の両者の関係は、文治・建久年間におけるそれとはやや変化をみせているように思われる。そこで、本発表はこの三つの造像について、史料を詳細に検討することにより、これらの造像の実態を改めて究明し、加えて運慶起用の理由や運慶の造った作例が有していた意味などについても、若干の私見を述べるものである。

三つの造像とは、①建保四年（一二一六）正月十七日に京都より渡された実朝持仏堂本尊釈迦像（雲慶作）、②建保六年（一二一八）十二月二日供養の大倉薬師堂薬師如来像（雲慶作）、③承久元年（一二一九）十二月二十七日供養の勝長寿院五仏堂五大尊の三件である。本発表では、まず運慶作例が安置された三つの堂宇・寺院の建立経緯及び目的、その性格などについて検討する。そして、これらの三つの造像が、実朝発願の持仏堂のケースも含めて、いずれも北条氏の主導によって行われたと推定し、その目的は単なる個人的造像ではなく、多分に政治的目的を帯びた造像であったこと、言い換えると、この時期の鎌倉に祀られた運慶作例は、政治的あるいは宗教的な意味において、特別な意義を有する本尊ばかりであったことを指摘する。そして、この時期においては運慶の起用が北条氏によって社会的に重要な造像に限定的に行われていた可能性を論じ、その傍証として、建保三年（一二一五）に北条義時の発願で造られたとみられる静岡・願成就院本尊阿弥陀如来坐像との比較を示す。

その上で、この時期の重要造像に運慶が起用された理由について、単に十二世紀末から続く幕府と運慶工房の密接な関係という以外にはないかについても探り、さらに三つの造像が北条氏の権力掌握過程とも重なるこの時期に行われたことを考え併せることにより、この時期の運慶作例が社会的に、とりわけ幕府を中心とする武家社会において一種の権威的な意味を持つように至った可能性についても触れることとする。